

チームワーク

川根 幾恵

クラスや学年を担当する時、保護者へのあいさつの際よく口にする言葉がありました。「学校（教師）と保護者の方は1つのチームです。…」

これは私がまだ、20代教師になって6、7年目頃の経験に基づいています。その頃、私は学級の生徒をきちんとしつけるのは自分の責任だと思い、自分の思う「いいクラス」にしたいと、とても気負っていたように思います。

今となっては「その指導」の内容も何も覚えていないのですが、その後のご家庭に伺った際の家族の方々のひと時は強烈な印象で忘れられない経験となりました。その男子生徒は寡黙で穏やかでしたが、トラブルの際、指導に納得した様子がないままに、ご自宅に経緯と指導についてご報告に伺いました。指導の未熟さも感じており、謝罪の気持ちもお伝えしたところ、お母様はその生徒にひと言、「おまえが悪い」と一刀両断でした。私ですらその生徒に代わって言い訳をしたくなるような気がしました。居間におられた祖父母の方も出てこられ、私の前でその生徒に諄々と説諭されたのです。話を聞くうち、その生徒はスッキリした顔で指導に納得し、私にも謝罪をしました。十分な指導ができず申し訳ない気持ちで、ひょっとしたら保護者の方から非難されるかもしれないと思いながら伺ったのに、トラブルそのものだけで無く、私の指導についてもご家族の方に配慮して頂いた気がしました。

何かトラブルがあった時、一方が100%の責任があることはほぼありません。多くの場合、半々で無くとも責任の一端はあるものです。生徒にしてみれば言いたいことはたくさんあったでしょうし、客観的にもそれは理解できる物だったからこそ、私も指導しきれず、生徒の代わりに言い訳もしたくなったのだらうと思います。「どっちが先だ」とか「どっちがより悪い」とか「・・・したから」など普段でもよく聞きますし、自分自身、内心の言い訳にすることがあります。しかし、たぶんこのご家族の教育方針は「自分にも何らかの落ち度があった時、それを人のせいにして責任回避しない」ことだったのでしょう。そして、未熟であがいている私をもおおらかに包み込んで指導をし、成長を促してくださったのです。

以後も家庭訪問では「先生がいらっしゃるんだからと、部屋を掃除していました。見てやってください。」など、その生徒とも保護者の方とも良い関係持ちながら過ごすことができました。ある日、落ち着かない教室で、「先生が何で怒っているのか。よく考えて！」と言うと、彼は「今日は機嫌が悪いから」と飄々と答え、「本当？」と聞くと他の生徒もうなずきながら「いつもはこんなことで怒らんよ」と言います。そうすると、「そうか。自分は気持ちの波が大きいんだな」と自分を客観的に理解し、冷静に生徒たちと向き合えるというようなことを繰り返しながら、建設的に生徒と一緒にクラス作り、授業づくりができた気がしました。学校教育は「自分が生徒と共に育つ」、「生徒は保護者の方と共に育てていく」ものなんだと実感する一年でした。あの訪問で保護者

の方々が私を支えてくださったからこそという部分も大きかったと思うのです。

それ以降も多くの保護者の方の生き方から刺激を頂いたり、援護していただいたり、やんちゃな生徒の指導に悩む時、クラスの他の生徒に励ましてもらったり、手伝ってもらったり、もちろん同僚や管理職の方々からサポートいただいたりしました。

たくさんの出会いが大きなワンチームとなって、私を支え励まし、成長させてくれたと実感しています。もちろん失敗の経験も含めてですが、それらの幸せな経験に感謝をすると同時に、私が他の人にとって、チームの一員になれたかとの反省もあります。

それぞれの目的も立場も活動も違いますが、学校は生徒だけでなく、教師そして保護者が「共に育つ場」だと思います。そんな「チーム伊里」がたくさんの良い出会いと経験の場となりますように！